

コロナ禍後の博物館に於ける、古文書資料の効果的 展示方法について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学学芸員養成課程 公開日: 2024-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 亜美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000385

コロナ禍後の博物館に於ける、 古文書資料の効果的展示方法について

松本 亜美*

はじめに

歴史博物館は日本の博物館の中でも多くの割合を占めており、歴史に興味がある人、ない人の両者とも、恐らく少なくとも一度は歴史展示を目にしたことがあるだろう。歴史展示といっても展示品は様々で、絵画、絵図、刀剣、甲冑、仏像、楽器等、挙げればきりがな。これらは全て運良く現代まで残されてきた、歴史を語る上で非常に重要な遺物であるものの、歴史展示というだけで難解、堅いといったような印象を持つ人は少なくない。

そのような印象を持たれがちな中でも、とりわけ古文書は博物館に於いて展示に向かない資料であるとされている¹。古文書展示とは博物館における長年の課題の一つであり²、歴史資料の中でも最も親しみづらい物の一つと言っても過言ではないだろう。筆者の感覚としても、古文書展示の前に立ち止まる人の数は他の資料の展示と比較して少ない傾向にあるように思う。原因の一つとして、美術資料や民具と異なり、文字資料は一目「見る」だけでは読み取れる情報が少ないことが挙げられる。数百年前の人々がその時感じたこと、考えていたことまで生々しく伝えてくれる点は文字資料の大きな魅力と言えるが、文字資料であるが故に困難も多いのである。

古くから現代まで遥かな時を越えて遺されてきた古文書資料が、その価値を理解されずに処分されてしまい永久に失われる事例も近

年存在する。古文書資料の貴重性と保存することの価値を発信するためにも、博物館に於ける古文書展示は、一般の人の目に触れる最も大きな機会として重要視すべきものである。

古文書展示の問題点についてはこれまでも多くの指摘があり、特に田中淳一郎氏の挙げた「一見しても時代のイメージが湧かず、平面的で見栄えがしない」「美術資料のように単体として展示することが難しく、関連文書を纏めて展示しなければ展示構成が困難である」「くずし字が難解で親しみづらい」の三点が主な課題点であるとされる³。これらの課題は今現在も変わらず、古文書展示に携わる人々の前に立ちはだかっているように見られる。

そのような中で現在、古文書展示は新たな局面に立たされていると筆者は考える。コロナ禍という未曾有の事態を経てデジタルアーカイブが飛躍的に進歩したため、過去と比較してみると、見ようと思えば簡単に家で古文書を見ることが出来るようになった。これにより、「古文書を見る」ために博物館や文書館に行く必要性は、今後ますます薄れていくであろうことが予測される。では、これからは何のために、何を求めて博物館で古文書を見ることになるのか。このような状況にあって、博物館で古文書を展示することの意義が問い直される時期になりつつあるのではないだろうか。

* 明治大学大学院文学研究科臨床人間学専攻博士前期課程

本稿では、古文書という展示に際して多くの困難を抱えた資料について、その魅力を伝達するための展示方法を先行研究並びにこれまでの展示事例を踏まえて検討した上で、コロナ禍後の古文書展示がどのように展開していくべきかについて考察する。

1. 古文書展示の研究史

(1) 研究史の整理

研究史の整理についてはこれまでに多くの研究者によって行われているが、鎌形慎太郎氏の研究が最もその詳細を纏めており、最新のものとしては高橋修氏が「古文書活用に関する研究一覧」を纏めた上で、古文書活用についての研究史としてⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期の三つの期に区切って論じている。

高橋氏はⅠ期を古文書活用の枠組みの形成期として、全国各地で歴史・郷土を扱う博物館が数多く設立されたことを背景に、歴史系博物館、中でも歴史展示のあるべき姿を巡り、その理念・理想が議論の中心となった時期であるとする⁴。Ⅱ期を文書館による古文書活用の理論化期として、当該期は、昭和62(1987)年の公文書館法公布に伴って、全国各地で文書館が設立されたことを契機として、文書館側から古文書の活用について本格的理論化が推進された時期とする⁵。現在のⅢ期は古文書活用の新展開の時期として、展示技術の工夫の深化、スマートフォンの普及やAIアプリの活用等を特徴としている⁶。

高橋氏の三つの区分は時系列に倣って非常に丁寧に纏められており、古文書活用がこれまでどのように展開してきたのかがわかりやすいものとなっている。筆者は高橋氏の先行研究に学びながら、最新のコロナ禍後の時期を含め、「古文書の展示に関する研究の変遷」について第1期から第5期までの五つに分類した。

まず1期は、菅根幸裕氏の論によれば、古文書を「書跡作品」として捉え、読み下しや翻刻は不要とする美術館的展示⁷が行われた

時期であり、林英夫氏の研究を下限とする1987年以前とした。高橋氏も指摘するように、この頃は古文書展示というよりも歴史展示についての論文が主であり、その中で古文書についても触れられているものが多く見受けられる。矢島氏は、歴史学領域の学的蓄積を展示に結びつける部分の研究は欠けていると言わざるを得ないと述べ、歴史展示の問題について触れている⁸。

2期としては、古文書の展示に関する論文が増加する1988年から、記録史料の展示についての柴田氏の研究までの1997年とした。古文書展示の研究が急激に増加するのは1990年のことであり、この時期は一つの転換期であると考えられる。

白井氏によれば、この時期にはヨーロッパ型展示(与えられる展示)からアメリカ型展示(参加する展示)への転換により、展示にも変化が求められるようになったことに加え、公文書館法の成立によって、考古・美術が中心で文書資料を十分に生かすきれてこなかった博物館は、その取り扱いの再検討を迫られたとされる⁹。

菅根氏もこの時期について、古文書という一見不可解な資料をどう展示するかという議論が、文書館活動側からの批判に触発される形で本格化し、増加してきていることを指摘している¹⁰。この時期は先述の情勢を背景に、田中淳一郎氏、村上義彦氏等を中心に、現行の古文書展示への問題提起、新たな展示形態を求める論が増加した時期であり、これを2期と定めた。

3期は1998年から2006年までと定めた。高橋氏によれば、古文書活用の面ではこの時期は文書館の研究が中心となっており、理論・理念としての研究が多く見られるとする¹¹。そして、理念上の研究は進みつつも、その実現のための技術については以前とあまり変化がないことを指摘されている。筆者もこの点については同様に考えており、これを3期と

した。

4期としては四コマ漫画を用いた展示実践を述べた米谷博氏の研究を皮切りに、2007年から2019年までとした。高橋氏は2010年初頭以降、デジタル機器、スマートフォンの普及も相まっての新たな古文書展示の形態が生まれているとして、様々な工夫や対象層の広がりが見られると指摘する¹²。技術の進歩によって実践的な研究が増加していることも特徴的である。

技術の発展と展示の関わりを示すものとして、北村啓子氏による国文学研究資料館でのデジタル展示開発成果についての研究がある。北村氏は、スマートフォンのAR機能によって古文書原本とデジタル上の翻刻を見比べたり、くずし字と翻刻を並べて読んだりすることも可能になったことを報告している¹³。AIによる現代語訳の読み上げ機能もあり、これらの技術の発展が古文書展示に大いに影響を与えたことが読み取れる。北村氏は空中ディスプレイや電子ペーパーの使用でより原本とデジタル情報の境界をなくしていくことが重要である¹⁴として、「物」自体を見ること以上に読みやすさを重視している。

5期としては、コロナ禍を経て「博物館で見る」ことの意義、「物」としての重要性を改めて問い直すべき時代として、2020年以降と定めた。今後更なるアーカイブの発展や、コロナ禍で生まれたおうち博物館の発展に伴って、古文書展示は物の重視という1期の特徴に立ち返りつつ、博品館・美術館的展示への単なる回帰ではない新たな方法を模索する必要があるのではないだろうか。

(2) 従前に指摘された古文書展示の問題点

次に、そもそも古文書が展示に向かないとされる原因はどこにあるのかを整理する。田中氏の指摘した先述の課題点の他にも、古文書展示を複雑化させ、親しみづらい印象を持たせる要因として、いくつか挙げられるもの

がある。

一つは、単に文字数が多いということである。そもそもが文字資料であることに加え、そのままでは意味の伝わらないくずし字の解説、資料自体の解説、時代背景の解説、と言ったように、古文書展示を見る際に来館者は大量の文字を読むことになる。古文書に興味のない人間からすれば、これらの文字を読むには相当の労力を消費することになるであろう。一目で魅力が伝わりづらい上に文字数が多いことは、古文書展示の最初のハードルを上げる大きな問題点と言える。

もう一つは、歴史学と歴史展示の抽象性・具体性の齟齬である。

林英夫氏は、歴史学の論文が文献史料を基礎として成り立つのに対し、展示では「物」を中心として物によって語らせる必要があるとして、歴史学と歴史展示の振れについて述べている¹⁵。矢島國雄氏もこれについて、抽象度の高い歴史学の伝達には高度の抽象性を持つ媒体が利用されるが、歴史展示はこれを具体的な「物」を主たる媒体として行おうとするものであると指摘している¹⁶。しかし文字、図表、音声、映像を駆使した場合、もはやそれは「物」を主とする展示ではなくなるとも述べており¹⁷、この抽象・具体の振れも古文書展示の困難の大きな要因であると言えるだろう。しかし、古文書展示に於いてわかりやすさ、親しみやすさを追求するためには、やはり文字や図表、音声等の併用は不可欠であると言える。物を中心に据えつつ、抽象度の高い媒体を併用することが求められる。

この問題と関連して、筆者が実施した埼玉県立公文書館の学芸員の方へのインタビュー調査に於いて、翻刻は付けることが可能だが、現代語訳は解釈が分かれるために難しいという話を伺った。抽象性が高く複数の解釈があるものを一つに定め、博物館で提示した時、提示されたものが見た人にとっての正解になる。翻刻のみでは知識が無ければ内容を

理解することが難しいため、展示の際には現代語訳も併用することが望ましいが、そのためにはこの問題を克服する必要があり、現代語訳を付けると言っても一筋縄では行かないのである。

また、菅根幸裕氏が指摘する、学芸員が「歴史を理解させよう」と気負い過ぎている傾向¹⁸も親しみづらさの要因の一つとして挙げられる。菅根氏は、博物館は来館者の自由な興味・探究心に満足感を与えることを念頭に置くべきで、普段無縁の物に触れた新鮮な感覚を通して、歴史に対する好奇心を満たすことが重要であると述べている¹⁹。歴史を知ってもらおうとするあまり、解説の文字数も学芸員の情熱に比例するように増加すると、かえって来館者から忌避される現象が起こってしまう。正しい歴史や書かれた内容を理解してもらうことだけが古文書展示の本質ではなく、ある程度は来館者の自由な感覚や解釈にも委ねるべきなのだろう。

(3) 問題の克服のために

これまでに古文書展示の主たる問題点を取り上げてきたが、ではその克服のためにどのような工夫が必要とされるのだろうか。

白井氏は美術品的な展示を批判した上で、文書全体のテーマを明確化すること、補助媒体により解釈を容易化させること、もの資料との併用、文書レプリカ等による参加型展示の追求を展示の方法として挙げる²⁰。考古展示に倣って発見当時の状態を示した展示にしたり、古文書をもの資料として扱う等の手段も有効であるとしている²¹。このような手段を用いて押し付けではない自由な解釈の方法を観覧者に示すことが、「文書講読」とは違う展示のあり方であると白井氏は述べている。

村上義彦氏は、古文書を読むものではなく見るものであると捉えることを提案し、読めなくても楽しめるような工夫が必要であると述べる²²。そのために、古文書を絵画化、映像

化、ジオラマ・パノラマ化する等して、古文書展示の文字数を減らし、美術展示のように見るものとして扱うことを提言している²³。

菅根幸裕氏は、古文書は単独で歴史を潜り抜けてきたのではなく、村・町・家の総体の歴史変遷の中で継承されてきたとして、古文書を含む、調度品や絵画等の総体の資料を「歴史資料群」と定義し、展示に於いてもこの元来の伝承形態を活かすことで、本当の近世・近代の世界を感得して貰うべきだと述べる²⁴。

高橋修氏は、イラスト、漫画、くずし字解読のAIアプリやQRコード等の電子機器を積極的に利用することで、古文書展示の大きな問題である文字の洪水を抑えることの重要性を指摘している²⁵。

このように、これまでに古文書の展示については多くの問題点が指摘され、その克服のための展示方法が提言されてきた。技術が目まぐるしく発展する現代に於いては、これらの積み重ねられてきた成果を振り返りつつ、新たな技術も取り入れていくことが求められるのである。

2. 古文書展示の実践例

次に、実際に古文書展示に際してどのような工夫が為されているのか確認するため、これまでに実施されてきた古文書展示の事例を数点取り上げる。

(1) 国立歴史民俗博物館

まず、国立歴史民俗博物館で2013年に行われた『中世の古文書・機能と形-』である。ここでは「読めなくても大丈夫！」というキャッチコピーで古文書の素材、文字の書き方、文書の伝達方法や文書が保存され伝来する過程、書状の折り方等、古文書の機能を紹介した。自分の花押を作ってみたり、文書を折りたたむ体験もあり、古文書に馴染みのない人や子どもも楽しめるような作りになっていた。

古文書の内容ではなく機能論に焦点を当てていながらも、読みたい人は翻刻を見ることが出来、音声ガイドによる支援もあるという展示形態は、来館者の様々なニーズに応えられる好例であると考えられる。ただ、国立博物館であるため規模が大きく、他の博物館でここまでの企画展を実施するのは難しいであろう。また、築瀬氏が指摘する、やはり内容が学術的で、一般人にとっては難解である点が課題として挙げられる²⁶。

(2) 千葉県立中央博物館

次に、先述の米谷博氏が企画し、千葉県立中央博物館で2005年に行われた企画展示『水郷の生活と船』を挙げる。この企画展では古文書の内容を四コマ漫画にし、当時の時代背景等も盛り込んで現代との違いを強調したという。担当した米谷氏は、4コマ漫画にしたことによって立ち止まって見てくれる人が普段より多かったと述べ、この展示方法は概ね好評であったとしている²⁷。但し、脚色も入るため、当時の服装や言葉遣いが正しくない可能性があったとも述べている。

来館者の目に止まり興味を持って貰うためには、多少の脚色も必要になってくる。これは歴史学と歴史小説の間の齟齬とも重なるものがある。わかりやすさ、親しみやすさを求める場合、ありのままの歴史よりも、一般向けに多少は噛み砕くことがやはり必要なのだろう。

(3) 富士山かぐや姫ミュージアム

最後に富士山かぐや姫ミュージアムで2016年に行われた企画展示『駿東・北伊豆の戦国時代』を取り上げる。この企画展ではSNSチャット風の解説パネルで古文書のやり取りを再現し、やり取りの内容に親しみを持たせる試みがなされている。この展示を担当した山本倫弘氏は、チャット風にすることで文書発給者と受給者のやり取りの一端をビ

ジュアル的に示すことが出来たとする²⁸。また、その短所も述べており、SNSやスマートフォンに馴染みのない高齢の世代に理解されづらい他、史実と演出のバランスも懸念されるとしている²⁹。

古文書を取り上げる上で非常に重要である発給者と受給者の関係性、発給に至る経緯を簡潔に、現代人の感覚でわかりやすく示すことが可能な点は非常に興味深い。しかしやはり千葉県立中央博物館の例と同様に、事実と脚色のバランスという点は古文書展示、引いては歴史展示の大きな課題となるようだ。史実からは離れすぎずに、しかし親しみやすさと面白みを出すためにある程度の脚色はする、その塩梅を見極めていく必要がある。

また、山本氏は古文書展示が現在過渡期にあるとして、古文書の魅力をどのように伝えるのか、物としての魅力か、書かれている内容かという本質的な問いへの向き合い方によって、展示の方法も異なってくることも指摘している³⁰。

3. 古文書の性格と展示方法

これまでに先行研究と展示の事例を見てきたが、そもそも一口に古文書と言っても形態や性格は様々であり、公家様文書の宣旨や綸旨、武家様文書の下文や御教書、奉書、上申文書の起請文や軍忠状、証文の譲状や売券等、多様に分類される。また、古代、中世、近世、近代と時代によっても背景や性質は異なる。古代、中世は残っている数が少ないために、その時代の古文書というだけで希少性が認められるのに対し、近世以降になるとその数は莫大なものになり、近代の文書はもはや数え切ることが不可能である。また、残っている文書の性質も、近世以降は圧倒的に地方文書が多い。このように、時代による相違もあり、その全てに対して望ましい展示方法を一般化することは困難である。

これらにはそれぞれ、その性格によって適

した展示方法が存在するのではないだろうか。それはまさに先述の山本氏が述べていた、物としての魅力と書かれている内容の魅力どちらに焦点を当てるのか、という問いにも繋がってくる。また、展示の対象者を誰とするのか、どういった年齢層に向けるのかによっても適した方法は変わってくるだろう。

この資料の個別具体的展示方法については鎌形慎太郎氏が既に指摘しており、鎌形氏は近世の地方文書を機能の観点から分類した上で、古文書展示論について、個別具体的資料の展示技術の体系化、展示技術論の細分化の作業が未だ不十分であることを述べている³¹。また鎌形氏は、歴史研究者は内容を最大限引き出すことを重視し、博物館学研究者は伝達法を重視するとして両者の目指すものの相違を指摘し、その間にいる学芸員の使命に込められる実践的な展示論の必要性を説いている³²。

それぞれの資料に適した展示方法については今後実践的に追求していきたい所であるが、どんな経緯でどのように、何のために、誰によって、誰のために発給されたのか。文書発給の背景に注目してメインに取り上げたり、訴陳状であればその訴訟問題の内容に踏み込み、過去の人々の世俗的な面に焦点を当てたりするのも良いだろう。地方文書であれば菅根氏の述べていた「歴史資料群展示」の形態を取り、村の総体の歴史を取り上げるのも手である。国立歴史民俗博物館で実践されたような花押の形や役割、文書の紙質、折り方に注目する方法もある。

くずし字自体に注目し、文字の解説に重きを置く方法もある。美濃加茂市民ミュージアムでは「読んでみよう『古文書』」として、語句の説明、現代語訳、読み下し、釈文を付けた展示が為されていた。この展示では古文書を読むために必要な要素が揃っているため、答え合わせをしながら解説して楽しめるようになっていた。先述の通り「読む」だけならデ

ジタルアーカイブや書籍でどこでも出来るようになっていたとはいえ、元々古文書に興味のない人が古文書に自発的に触れることは恐らくないと言っていい。そういった層に興味を持たせる工夫を重ねることで、くずし字に初めて触れる層にその解説の面白さを知って貰うことも、博物館で古文書の展示をする意義になり得る。

このように、資料の性質に加えて、何を重視するのかによっても展示方法は非常に多様なものになる。鎌形氏が指摘したように、これらの方法を個別具体的資料に当てはめ、個々に適した実践的な展示技術を体系化していくことが最終的には必要となるであろう。

4. コロナ禍を経ての古文書展示

先述の通り現在はコロナ禍を経てのデジタルアーカイブの進歩によって、博物館でなくとも古文書を見ることが出来るようになりつつある。その時代にあって博物館で古文書を展示する意義とは、やはり「本物」に触れることが出来る点、元々古文書に興味のない人の目にも止まる点にあると筆者は考える。展示の方向性も、読んでもらう、内容を知ってもらうだけならば極論を言えば博物館でなくても可能であるため、本物であるということに焦点を当てる傾向が今後強まることが予測される。今目の前にあるこの古文書の前に、五百年前の人間が実際に座っていたのだ、と実感できるような展示方法を模索する必要があるだろう。来館者が本物をその目で見ることで抱いた印象こそが、博物館で見ることの意義に繋がると考えられる。

しかし、破損の危険性が高い資料や貴重性の高い資料になると、複製が展示されており「本物」ではないことも多い。その場合は、複製であることを活かし、直接触ったり好きに捲ったり出来るようにしてみることも一つの手であると考えられる。くずし字が読めなかったとしても、直接自らの手に取り、その重さを

実感し、字の筆運びや難解さを間近で見ることで、デジタル上とは違う博物館ならではの楽しみ方に繋がるのではないだろうか。

先述の通りコロナ禍後の現代は、博品館・美術館の展示への回帰とまでは言わなくとも、「物」であることを重視する新たな時代に入ったと言える。多様な来館者層に合わせて読み下しや翻刻等の内容を知るための手段も使いつつ、本物であることの重要性の強調を両立させることが必要であると筆者は考える。

また先述の通り、元々古文書に興味を持たない層は、デジタルアーカイブ化が進んだとしても古文書に触れる機会はない。そのため古文書には興味がなく、他の目的で博物館に来館する人々に古文書に触れてもらう場として、古文書展示は重要な役割を果たすだろう。全ての展示がそうである必要はないが、「入門の場」としての初心者に向けた親しみやすい古文書展示が、今後更に増加していくことが望まれる。

おわりに

ここまで古文書展示についての先行研究を改めて整理し、これまでに実施された展示の実践例を参照した上で、古文書資料の個別具体的展示の方法と、コロナ禍後の古文書展示の意義について述べた。古文書展示については既に多様な視点からの研究の蓄積があり、博物館現場でも日々新たな取り組みが為されている。コロナ禍が明けて間もない現在、コロナ禍を契機としたデジタルアーカイブの発展やおうちミュージアムの発展等の今後の動向を注視し、情勢を見極めることが必要となる。

今後の課題としてはより具体的に古文書の展示技術を体系化するためにも、個別の資料毎の展示実践例を収集するほか、自らも明治大学博物館に於いて古文書展示を企画することで、実践的に研究を進めたい。また、最も重要な事項である、来館者の古文書に対する印

象についても調査し分析していく必要がある。

謝辞

本稿執筆にあたりインタビュー調査にご協力くださった埼玉県立公文書館の新井浩文様、駒見敬祐様、木暮咲樹様に心よりお礼申し上げます。

注・引用文献

- 1 田中淳一郎「古文書の展示と地域資料館—京都府立山城郷土資料館の活動」『歴史評論』483号、1990年、p.57
- 2 山本倫弘「古文書展示における補助資料のビジュアル化の試み—「SNS チャット風古文書解説パネル」の紹介—」『富士山かぐや姫ミュージアム館報』第32号、2017年、p.55
- 3 注1文献、p.58
- 4 高橋修「古文書展示・普及事業研究の回顧と展望」『博物館研究』57巻8号、2022年、p.27
- 5 注4文献、p.27
- 6 注4文献、p.29
- 7 菅根幸裕「古文書を展示する」『月刊 歴史手帖』第20巻3号、1992年、pp.14・15
- 8 矢島國雄「歴史展示における補助媒体について」『博物館研究』17-2、1982年、p.20
- 9 白井哲哉「古文書資料をいかに展示するか—文書資料の展示技術小考—」『MUSEOLOGIST・明治大学学芸員養成課程年報』5、1990年、p.26
- 10 注7文献、p.14
- 11 注4文献、p.28
- 12 注4文献、p.29
- 13 北村啓子「古典資料・古文書の展示におけるAR技術の利用：《古典AR》の紹介」『国文学研究資料館紀要 文学研究篇』44号、2018年、p.24
- 14 注13文献、p.27
- 15 林英夫「古文書の展示と地域資料館—京都府立山城郷土資料館の活動—」『歴史評論』451号、1987年、p.9
- 16 注8文献、p.20
- 17 注8文献、p.20
- 18 注7文献、p.19

- 19 注7文献、p.19
 20 注9文献、p.30
 21 注9文献、p.30
 22 村上義彦『博物館における歴史展示の実際』
 雄山閣、1992年、p.34
 23 注22文献、p.33
 24 注7文献、p.17
 25 注4文献、p.29
 26 築瀬大輔「古文書展示における補助資料の効
 果的活用—地域連携の中で試みた古文書ハンズ
 オン」『群馬県立歴史博物館紀要』36号、2015
 年、p.97
 27 米谷博「古文書をやさしく展示する—歴史資
 料の展示方法をめぐって」『Museum ちば』38号、
 2007年、p.15
 28 注2文献、p.57
 29 注2文献、p.59
 30 注2文献、p.56
 31 鎌形慎太郎「地域博物館における近世地方文
 書展示の研究」『國學院大學博物館學紀要』33卷、
 2008年、p.186
 32 注31文献、p.176

参考文献

- 高橋大樹「地域博物館における古文書展示：平成
 二五年度企画展「湖都大津のこもんじょ学」報
 告」『大津市歴史博物館研究紀要』20号、2014年
 長村祥知「博物館における古文書・古記録の展示
 と教育」『人間教育学研究』3号、2015年
 吉田優「入館者の興味・関心をひきおこす古文書
 展示のこころみ—明治大学博物館「オーソドッ
 クスな古文書展示」の事例から」『日本ミュージ
 アム・マネジメント学会研究紀要』19号、
 2015年
 八木滋「歴史展示に関するノート—「展示叙述」論
 の視点から—」『大阪歴史博物館研究紀要』第15
 号、2017年
 柴田知彰「記録史料の展示に関する一試論」『秋田
 県公文書館研究紀要』3、1997年

Effective ways of displaying archival materials in a museum after the Corona disaster

MATSUMOTO Ami

This paper examines methods of displaying archival materials in museums to effectively convey the appeal of archival materials. Archival materials are one of the most difficult materials to display in museums. In order to analyze how to display these text-filled materials in order to convey their appeal, we will review previous research on the display of archives and past examples of such displays, and also consider how the display of archives should develop after the Corona disaster. In this age when digital archiving has progressed after the Corona disaster and people can now view old documents without going to museums, the significance of exhibiting old documents in museums may be reexamined.